

三好綾先生、振り返る機会をいただきました。

保健医療学分野 看護学領域
櫻井良子

三好先生のご講演の後、私は2つのことが頭に残りました。一つは患者に対する看護師である自分のこれまでの姿勢、そしてもう一つは家族を亡くした当時者としての思いです。

私は急性期病院の外科病棟に勤務していました。病棟の入院対象の患者さんは、がん患者さんが多い場所でした。手術を受ける患者さんの手術の送り出し、迎え、離床の介助を行いながら、化学療法点滴の管理や、終末期の患者さんの援助をし、そして入退院のベッドコントロールをするという、目の前のことを安全に終わらせることで精一杯の毎日を送っていました。

在院日数の短縮により、ほとんどの患者さんが手術の前日に入院され、術後は離床がかかるとすぐに退院されます。手術や化学療法の説明や患者の同意に関しては、外来で行われるため、病棟では同意書類の確認と、個別性のない手術の流れの説明を行うだけでした。説明時には「何かご質問やご不安がありましたら、その都度お申し出ください。」などと、知ったような対応もしていました。

三好先生のご講義の中に出てきた、「三好さんの気持ちも聴かず説明だけをしていった看護師」ですが、私も同じような対応をしていたのではないかと、ギョッといたしました。このような看護師が多いのは事実かもしれません。

お講義を伺いながら複数の患者さんのことを思い出しました。入退院を繰り返しながら治療を続け、若くして2人の子供さんを残して旅立った患者さん、胃切除のため、手術室入室直前に「あなた健康で胃があっていいわね！」と、私に怒鳴った患者さんなど。

皆様いろいろな感情を抱いて治療をされていたと改めて感じます。

私は、患者さんの言葉を傾聴できる看護師を目指したいと思っていましたが、今回の講義を拝聴し、患者さんの話を聴くのではなく、患者さんが話ができるような関わりをしていかなければならないと思いました。とても恥ずかしい話ですが、看護師になってからの姿勢を振り返ることができました。

私は、この1年間で家族を2人亡くしました。実は三好先生がお講義なさっている間は、涙が止まりませんでした。お話の中にもありましたが、最期まで自分らしく生きられるように、家族として関わられたのかと、多くの後悔があります。

家族の自己決定ということは重要視してはいませんでした。本当に後悔しています。

これからもいろいろなことを考えながら、医療に関わって生きていきたいと思います。これから出会う患者さんを大事に考えて看護をしていきたいと思います。

三好先生、本当にありがとうございました。